



シン・ゴジラ

「映画を観て日本と日本のエネルギー政策について考えてみた」



比良園業記

シン・ゴジラで提示されたもの

『シン・ゴジラ』を鑑賞して思ったのは、以下のことです。

*この作品は「震災後」を描こうとするとき、避けて通れない（必ず参照すべき）ものになる。

*この作品だけで完結しているようにも思えるが、謎は多く残されている。

*果たして続編はあるか。そもそもこの作品は、2016年の日本なのだろうか？

*『シン・ゴジラ』から読み取れるものとは――。

それぞれについて、次のページから考えていきたいと思います。

「震災後」のゴジラ

『シン・ゴジラ』は1954年の初代ゴジラが下敷きだといわれますが、その世界は当然「震災後」となります。

とくにリアリティを感じたのは、自衛隊のヘリや車による避難、避難所の光景、そしてSNSで情報が拡散される様子です。いずれも2011年以降、東日本大震災だけではなく、災害が起こるたび繰り返し報道されてきました。モニタリングポストも各所に設置され、平常と異なる値が検出されれば直ちに知らされる。それが映画の中の世界です。

ゴジラが核エネルギーで活動し、モニタリングポストの数値がそれゆえに上昇している。そう判明するのも、原発事故を経験したからでしょう。しかし原発事故が収束したとはいまだ言い難いように、現状を把握することと、対策を立てることは別です。映画では国連安保理も巻き込み、ゴジラに対し核兵器が使用されることとなります。

対抗して「凍結」を打ち出すのが巨大生物災害対策課、通称「巨災対」です。ゴジラが血流によって体内の原子炉を冷却しているとわかり、血流を止め、メルトダウンを起こさせれば、ゴジラは（生物としての防衛本能によって）活動を停止するに違いない、というのがその根拠でした。

核のボタンはすでに押され、発射へのカウントダウンは始まっていましたが、一時的に止めたことでゴジラの「凍結」が成功します。ただカウントダウンはあくまでも中断であり、中止ではない。ゴジラがまた動き出せば、日本は三度めの原爆投下を経験する――。映画としての結論はそのようなものでした。

現実世界に置き換えると、「また原発事故が起きるのでは」という危惧が当てはまるでしょう。再稼働すれば事故の危険は高まりますし、たとえ停止していても、放射性廃棄物の問題は解決されないからです。それを解決する手段が核燃料サイクルでした。使用済み核燃料から取り出したプルトニウムを再利用して原発を稼働させ、核兵器の開発に手を染めることなく、平和利用しつづけるというものです。

しかし2016年9月14日付の日本経済新聞朝刊には、核燃料サイクルが正念場を迎えたという記事が出ています。1995年、ナトリウム漏れ事故による火災が起きて以降、ほとんど停止したままの高速増殖炉もんじゅを廃炉にするか否か、決断を迫られているという内容です。記事によれば、日本には核兵器に転用可能なプルトニウムが48トン存在するそうです。2018年には日米原子力協定が更新時期を迎えます。もんじゅを諦め、通常原発を使用するプルサーマル発電も可能性としてはありますが、原発再稼働の見通しが立たない中では、現実的な方策とは言えないでしょう。

『シン・ゴジラ』が意味するものは、ゴジラは日本で誕生する、つまり小野俊太郎氏が『ゴジラの世界』で指摘したように、「原因も結果も国内で完結する物語とみなせるようになった」(p121)ということではないでしょうか。原発事故を経て、日本は核エネルギーとどう向き合っていくのか、改めてその姿勢を問われているのです。

現実対虚構ということ

自衛隊がゴジラを攻撃した際、弾切れで撤退するのはかなり現実に沿った展開でしょう。

ゴジラ作品で自衛隊の装備について触れたのは初めてかもしれません。

自衛隊が命令なしには攻撃できないということも。

ゴジラは虚構ですが、ゴジラが襲った日本については「現実」に沿って描かれています。

米軍の装備についても同様ですが、米軍機が撃墜されるのは「虚構」と言えるかもしれません。ゴジラの反撃で東京が火の海になったことも、ゴジラが反撃したらそうなるかもしれないと思えました。その意味で、虚構と現実がうまくミックスされていたのではないのでしょうか。

日本の対応を描いた前半では、極端な例えかもしれませんが、劇中の一日に20分程度かけられていたように感じました。対して、それまでと異なる対応をとりはじめる中盤以降は、劇中の一日にかけられる時間が短縮され、そのため後半は駆け足になった印象です。前半のほうが、現実の裏付けがある分、丁寧に描写されていたと思います。

これは仕方のないことで、ベースにするものがある場合は修正すればよいですが、ない場合は一から作ることになります。一から作ったものと修正を重ねたものを比べれば、修正を重ねたもののほうが、出来が良いように見えてしまうのです。しかし一から作ったものは、「初めて描写されたこと」それ自体に意味があります。

たとえばゴジラの造形は、これまでのゴジラ作品をベースにしつつ（主に1954年版と1984年版だと思いますが）、段階的に形態を変化させるやり方をとっています。第四形態として現れる「ゴジラ」は多くの人に馴染みのあるゴジラですが、最初からその姿ではないことが異形の生物としての、ゴジラの特異性を際立たせているのだと思います。

生物として、という視点から見ると、第一形態から第四形態までを通してゴジラは自分の都合で動いています。もちろん人間の都合などおかまいなしに。ただ生きていくだけでもかかわらず、巨大で恐怖を与える存在であるがゆえに疎まれ、排除しなくてはと思われる。まるで小人の国に行ったガリバーのようです。ガリバーは小人と意思疎通できましたが、ゴジラは意思疎通ができません。そもそも、意思疎通ができない（と思える）存在として描かれています。意思疎通のできない異形の生物に、人間は恐怖しか抱きません。そのことも、ゴジラが荒ぶる神だというひとつの理由であるように思います。

劇中で大戸島の言い伝えが取り上げられていました。大戸島の人間は神楽を舞うなど、荒ぶる神ゴジラを鎮めようとするのだと。しかし必ずうまくいくわけではありません。あるときはうまくいっても、次うまくいくとは限らないのです。ゴジラは人間のコントロールを超えた存在であり、だからこそ神なのです。神の存在は神学的な話になりますが、人間が繰り返し造形してきた神は現実であり、これまでに造形されてきた神をもとに、新たな神をつくり出すことも可能です。そうして造形されたのが今回のゴジラであり、人間のコントロールを超えた巨大な異形の生物を人間の手でコントロールしようとするのが、『シン・ゴジラ』なのだと思います。

神としての現実性に加え、原発事故を経て、原子炉に電力供給を頼るという「現実」が多くの日本人に受け止められるようになりました。原子炉を体内に持つゴジラは本当に虚構なのでしょうか。むしろ現実なのはゴジラだけであり、ゴジラ対応が（どんなに現実に即しているように見えても）虚構なのではないか。そのようにさえ、思えてきます。それが現実対虚構ということの、本当の意味なのかもしれません。

1954年の『ゴジラ』では、ゴジラが出現したのは硫黄島付近とされています。硫黄島はご存知のように太平洋戦争の激戦地で、そこからゴジラを、戦争で無念の死を遂げた人々とする考え方が生まれたと思われます。

硫黄島から、ゴジラは大戸島へ向かいました。大戸島は架空の島ですが、小笠原諸島のひとつと考えられているようです。大戸島の人々はゴジラを荒ぶる神として敬い恐れ、時化に際してはゴジラを鎮めるため神楽を舞います。

そして大戸島は、『シン・ゴジラ』で牧教授の出身地とされています。パターソンが言及した大戸島の言い伝えとともに、牧教授は育ったのです。アメリカのエネルギー関連の研究所で、牧教授がゴジラの研究をしていたことは分かっています。遺された資料をもとに対ゴジラ作戦が立案され、成功を収めました。その際、半減期の極端に短い新たな元素の存在が確認されています。

少なくとも二年あれば、放射能の影響はなくなる。そのことが明らかな希望として提示されていました。

では、その新しい元素はどうやってできたのでしょうか。その元素と牧教授の関係は？

そう考えていくと、牧教授の言葉が重要な意味を持つように思えます。

牧教授が「好きにした」のは、ゴジラが体内に持つ原子炉を使い、新たな元素を作り出そうとしたことではないでしょうか。エネルギー関連の研究所で、依頼を受けてゴジラの研究をしていた牧教授は、最終段階として「核実験」に相当する実地の試験を行おうと考えたのです。それは原子爆弾のようなものではなく、エネルギーとして使うことができ、なおかつずっと後まで残らず短期間で消える物質です。それを作り出すことが、牧教授の目的だったのかもしれませんが。大戸島出身の牧教授は、神楽を舞わずとも「荒ぶる神」ゴジラを鎮めることができる方法を、探っていたのではないかと思うのです。

では、カヨコ・アン・パターソンはどのような存在でしょうか。大統領特使として来日したパターソンは、まず牧教授の捜索を依頼します。その過程で教授の遺した資料が発見されるわけですが、よくよく考えてみると、出来すぎている感はぬぐえません。パターソンが探してほしいといわなければ、羽田沖のプレジャーボートが牧教授のものだと、果たして伝わったろうかと思うからです。

「牧」という人物は1984年版『ゴジラ』で新聞記者として登場し、それなりに活躍するものの、『シン・ゴジラ』における牧教授のほうが大きな役割を担っていると思います。「牧」という名前が使われたのは、1984年版『ゴジラ』もある程度下敷きになっている、という以上の意味はないでしょう。

「パターソン」については、興味深いことが分かりました。第二次大戦中、原爆を製造したマンハッタン計画に、パターソンが二人かかわっていたのです。一人は科学者で、もう一人は政治家。科学者のほうはクレア・キャメロン・パターソン。地球の「年齢」を正確に割り出したことをご存知の方も多いでしょう。政治家はロバート・ポーター・パターソンで、陸軍次官として実務的なことを担当していたようです。

重要なのは、科学者と政治家、二人のパターソンが同時にマンハッタン計画にかかわっていたことです。『シン・ゴジラ』でゴジラを凍結できたのは、牧教授が遺した資料をもとに立案した作戦を、日米共同で遂行したからでした。日米共同作戦を提案したのは、ほかならぬカヨコ・アン・パターソンです。

つまり牧教授は科学者クレア・キャメロン・パターソンを、そしてカヨコ・アン・パターソンは政治家ロバート・ポーター・パターソンをもとに造形されたのではないのでしょうか。牧教授は日本人ですがアメリカの研究所に在籍し、カヨコは日本とアメリカ、二つのルーツを持つ人物です。日米が共同でゴジラの脅威を(ひとまず)取り除く際、きわめて重要な役割を果たす人物を、二人のパターソンに求めたのではないか、と思えるのです。

牧教授はゴジラの体内で実際に試験を行ない、新たな元素を作り出したのでしょう。マンハッタン計画をなぞるかのような行動ですが、作り出したのは原子爆弾のような、コントロール不可能なものではありませんでした。どのように実験をコントロールしたのか、またプレジャーボートから消えた彼が本当に死んでしまったのかは分かりませんが、もしかすると牧教授はゴジラの中で生きているのではないか、とも思えます。ゴジラの背びれに連なっているのは、牧教授なのかもしれません。

矢口が口にした「福音」という言葉も、理想的な生命のかたちを表すと同時に、福音となるエネルギーと解釈することもできます。新たな元素を使って原発を動かせば、たとえ事故が起きても避難生活は最長二年。それ以上長引くことはないとわかっていれば、生活設計をやり直すこともできます。見通しが立つことは、希望につながります。その希望こそ、福音なのかもしれません。

残された謎 2 『シン・ゴジラ』の世界はいつなのか？

『シン・ゴジラ』が公開されたのは2016年の夏です。内容から、2011年の震災と原発事故を踏まえていることは明らかであり、少なくとも2011年以降の話だというのが分かります。また観客は同時代の社会状況と絡めながら鑑賞しますので、2016年の話だとしても不思議はありません。しかし映画のパンフレットを開いてみると、2016年だと考えるにはおかしい部分もあります。

ゴジラの出現について、「探求」の章には、各国が捨てた放射性廃棄物をゴジラが食べ、それによって変異を遂げたということが書かれています。捨てられたのは、60年前。

2016年から60年さかのぼると、1956年。ソ連がスプートニクを飛ばす前の年です。そのころ、大量の放射性廃棄物が「各国から」出されていたのでしょうか。

そう考えると、60年前というのは、少なくとも1960年代半ばから後半にかけてではないかと思えます。原子力発電が実用化されたころ。そして東西冷戦下で両陣営の軍事・宇宙開発が盛んになったころ。そうだとすると、1960年代半ばから数えて60年後となるのは、2025年以降です。

『シン・ゴジラ』の世界では、東京オリンピック・パラリンピックはすでに終了していることになります。各所に設けられたモニタリングポストも、オリンピック・パラリンピック対策だったのかもしれないとさえ思えます。原発はおそらく再稼働しないままなのでしょう。2018年の日米原子力協定が更新されているかどうか、定かではありませんが、別途協定を結ぶなどして、プルトニウムを保有していることの是非を云々しないまま急場をしのいでいるのかもしれないかもしれません。そうだとすれば、「危機」ではなく「平時」ですから、ゴジラ出現時に緊急対応ができなくても不思議はありません。

もし「未来」の話なら、日本は変わらないという話でもあり、変わるかもしれない、という話でもあります。

本当に新しい元素でエネルギー需要を賄えるなら、従来の原子力発電より安全性も高く、万一のときでも先の見通しが立てられる、文字通り「夢の」エネルギーとなるかもしれません。ずっと後まで残る物質ではないため、抑止力にはつながりませんが、そのことがかえって、核の抑止力によるパワーバランスで成り立っている世界から、抜け出せるチャンスを与えてくれると思うのです。『シン・ゴジラ』から私が読み取ったのは、核抑止力によるパワーバランス、つまり 戦後レジームからの脱却 の可能性です。

1984年版『ゴジラ』と『シン・ゴジラ』

ここで、1984年版『ゴジラ』にも少し触れておきます。

ゴジラ対策として立案した最初の計画は、ゴジラを眠らせるものでした。

しかし眠らせるための「スーパーX」がゴジラによって破壊され、計画は失敗。

さらにはソ連からミサイルが誤射され、それを東京上空でアメリカが迎撃して破壊、東京が火の海になりました。

手詰まりとなった日本は生物としての本能を利用してゴジラを火山へ誘導、火口へと転落させ、死に至らしめる結末でした。

『シン・ゴジラ』と比較してみると……、

当初はゴジラを滅するつもりが、最終的に活動を停止させる（＝眠らせる）ことになりました。それは生物としての本能を利用したものです。そしてミサイルが落とされ、東京は火の海になります。

違っているのは、ミサイルを落としたのはアメリカであること。

冷戦下の1984年には想像もできなかったことでしょう。

国連安保理がゴジラに原爆を落とそうとするのも、冷戦が終結した（けれども新しい秩序が成立していない）現在ならではの展開です。

フランスを味方につけることにも意味がありそうです。日本は現在、高速炉の開発でフランスと協力しています。核燃料サイクル確立のためにフランスの力が欠かせないというのは（今後どうなっていくかわかりませんが）、ゴジラ対策を実行に移すためフランスの協力が欠かせなかった、という映画での展開と重なります。

やはり『シン・ゴジラ』は1954年版と1984年版を下敷きにしつつ、冷戦崩壊後および3.11後の世界を描いたものだと言えそうです。そこには、微かではありますが、希望を垣間見ることができます。その希望こそが、戦後レジームからの脱却であると思うのです。

国連安保理が日本に原爆を落とそうとするなど、かつての敵国条項がいまだ存在する国連への、不満のあらわれと捉えることもできるでしょう。だから国連改革が必要なのだと。

ゴジラを凍結させようと奮闘したのは、それまで不遇をかこってきた人々であり、彼らがいたから、日本全体を焦土とすることなく、ゴジラを眠らせることができました。

新たな枠組みをつくり、それまでのやり方で評価できない人を評価できるようになれば、まったく新しい世界が始まるのです。私たちが思っているよりも至極簡単に、しかもあっけなく。

そのことを、私は『シン・ゴジラ』から感じました。

あとがき

『シン・ゴジラ』を観た直後は、続編があるのではないかと思いましたが、今はあるかどうか、分らないと思っています。しかし、もしも続編があるなら、ゴジラは何らかの理由で活動を再開し、原爆投下がより現実味を帯びる気もします。そうなってほしくはないですが、現実が変わらなければ、映画の中で劇的な大転換が起こることもあり得ると思うのです。

『シン・ゴジラ』は日米が共同でゴジラを凍結させ、当面の危機を回避するのが肝ですが、作品を理解するにあたり、二人のパターソンや新エネルギーの可能性など、いわゆる戦後レジームから脱却し（東西冷戦後の）新たな秩序を構築することが、一つ大きなテーマであるように思いました。

ゴジラに投下された MOPII は核兵器を除いてもっとも強力な兵器だそうです。硬い外皮を貫通しダメージを与えるためとはいえ、果たしてそこまでする必要のあるのかと疑問を感じました。MOPII に限らず、どこまで兵器の性能を高めればよいのか、性能を高めることが本当に争いをなくすのか、そんなことも考えてしまいます。しばしば議論される核兵器の「抑止力」も同様です。

もんじゅについては、日本経済新聞の 2016 年 9 月 22 日付朝刊に廃炉の方向で検討されるとありました。2017 年暮れには廃炉計画も提出されています。それによると 2022 年度までに核燃料を取り出し、2047 年度までにナトリウムを抜いて廃炉にするとのこと。しかし後継の原子炉については何も決まっていないようです。（2017 年 12 月 6 日付朝日新聞デジタル）

日本のエネルギー政策は今後どうなるのでしょうか。2018 年 1 月現在、原子力協定見直しの申し入れは行なわれなかったそうです。これにより協定は自動延長され、使用済み核燃料の再利用が引き続き認められることになるため、核燃料サイクルの継続が決定したと報道されています。

（2018 年 1 月 15 日付毎日新聞、1 月 17 日付東京新聞ウェブ、日本経済新聞ほか）

もんじゅの冷却材に使われているナトリウムは爆発しやすく扱いが難しいため、過去にも事故が起きています。廃炉が順調に進むのか心配です。現存するプルトニウムも、2016 年末現在、46.9 トンだそうです。

（2017 年 8 月 1 日付毎日新聞 内閣府の発表による）

日本でゴジラが産まれたことと、日本国内にプルトニウムが大量に存在することは、やはり無関係とは思えません。今後の方針によっては、本当に「ゴジラ」が誕生してしまうかもしれない…。そうした考えを、ばかばかしいと一蹴できないのは私だけでしょうか。

1954 年に初代ゴジラが上映されたときから、映画を通して核拡散への懸念が表明されてきました。2016 年に上映された『シン・ゴジラ』も、その伝統を受け継いでいると感じます。

そして 2017 年のノーベル平和賞を核兵器廃絶国際キャンペーン ICAN が受賞し、2018 年の今、核廃絶・不拡散への機運がかつてないほど高まっているように思います。

これを生かせるかどうか、つまり「ゴジラ」を現実には誕生させないために行動できるかどうか、そのことが今、なによりも問われているのではないのでしょうか。

修正履歴・参考文献等

(追記：9月30日、ページを追加しました。1984年版との簡単な比較です。

「あとがき」も修正しました)

(追記2：10月18日、ページを追加しました。虚構対現実について考えてみました)

(追記3：2018年1月26日、あとがきを修正しました。これが最後の修正です)

最後まで読んでくださり、ありがとうございました。

比良岡美紀

参考文献：小野俊太郎『ゴジラの精神史』（2014年彩流社）

日本経済新聞 2016年9月14日付朝刊

日本経済新聞 2016年9月22日付朝刊

パターソンやマンハッタン計画、および高速増殖炉原型炉もんじゅや核燃料サイクルについては、ウィキペディアの記事を参照しました。また文中に言及のある新聞記事は、朝刊・夕刊と明記されていない場合ウェブの記事を指します。